128

情報委員會七・三〇　情報第三號

同盟來電　（不發表）

「日本は戰ふ」米紙の論調

ニューヨーク二十九日發同盟

ポルチモア・サン紙は二十九日付の紙上で北支事變に關し「日本は戰ふ」と題して次の如く論じてゐる、

「北支で遂に大規模な日支兩軍の衝突が起つた樣だが、日本の意圖は政治的と云ふよりも寧ろ經濟的のもので、支那市場を支配する慾望に驅られてゐるのか、又は國內の經濟危機でこれを打開するために餘議無く戰爭するのかの何れかだが、どちらにしても廣田外相の「日本は極東平和維持のため闘つてゐるのだ」といふ聲明は、諸外國に取つては全く信ぜられさうも無い、若し戰爭が始れば米國の同情は支那に集るだらうが、この同情も度が過ぎると危險である、勿論日本は國際條約を破つてゐるし、日本をして米國が斯かる條約違反を默過すると考へさせるわけには行かぬが、滿洲事變の經驗にも明らかな通り、單なる理想論は日本の侵略を止める力は無いか、我等としてはどちらにも贔負せず、極東の危機に捲き込まれる樣な事を避けねばならぬ、此の點現行中立法は危險なもので、中立法が適用されゝば明かに日本は有利になる、さればとて米國が今遽かに中立

法を日本に不利になるよう修正すれば、日本がこれを非友誼的行爲を取る虞れが有る、政府は全力を盡し兩交戰國の何れにも敵意を起させぬような方法で米國の中立政策を決定する道を發見すべきである」

ガーディアン紙の論説

ロンドン二十九日發

マンチエスター・ガーディアン紙は二十九日の紙上北支事變に關し次の如き社説を載せた

「戰爭は既に始まつた、今の唯一の望は戰爭の速かな終止だが、其れも望薄だ、日本が今戰爭を欲せぬと稱して居るのは相當眞實であらうが近衛首相、廣田外相の議會に於ける聲明も滿洲及び上海兩事變を想起する者を納得させるに足らぬ、日本が眞に欲するものは南京政府の强化に先立ち北支五省をコントロールすることだ、支那が斯くも速かに對日的行動を餘儀なくせられたのは遺憾だが支那を責めることは出來ぬ、日本は今なほ支那人の心の都として懷かしむ舊都北平の占領が支那民衆の忍び難いものであることを知ると共に自國が既に極東に有する地位や日支友好關係より來る繁榮に思を至すべきで、日本の勢威は大で其の武力の强大さも等しく認められてゐる、日本人は支那征服の實際上不可能なこと又戰爭の負擔が大きい事を知つて居る而かも日本が道德的法律的根據もなく、失ふのみで得る所のない戰爭を遂行するとすれば全世界の非難を受けるだらう」

129

秘

情報委員會七・二九　情報第四號

紐育新聞論評

同盟來電　不發表

「ニューヨークタイムス（廿八日）

「東亞安定の道」

「廣田外相は二十六日の議會で日本の政策は日滿支の協力調和、及び共產主義を東亞より驅逐する事に依る極東安定の達成にすると聲明したが、これは今日本が北平附近でやつてゐる事と餘り調和せぬ樣だから我々には空虛な響しか與へぬ、安定の使命を口にしながら日本こそ極東の平和を攪亂してゐる唯一の國なので、日本の安定といふのは覇權獲得を意味するらしく、日本の遣り方は「日滿支の協力」を却つて不可能ならしめる狀態で、近衛首相が支那政府民衆に再考及び自省を要望してゐるのは、內閣が現地軍をして自由行動を執らしめたり、支那に對し屈辱的最後通牒を强行したりするのを認めてゐる以上一種の戲談としか取れない、廣田外相は諸外國に對し日本の忍耐自省の態度を了解されたいと言つてゐるが、これは虫の良過ぎる話であつて、西洋諸國の輿論が日本の對支强力政策を是認すると思つたら大きな間違ひである」

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/